「底が突き抜けた」時代の歩き方 258

暗いトンネルの中の不思議の世界 – アニメ映画『千と千尋の神隠し』

宮崎駿監督のアニメ映画『千と千尋の神隠し』の主人公は、どこにでもいるようにみえる１０歳の少女千尋である。しかし、どこにもいそうにない少女であるのは、映画の中での彼女の普段とは見違えるような、スーパーな獅子奮迅ぶりをみれば、よくわかる。無神経、無防備、無頓着に行動して、豚の姿に変えられてしまう千尋の両親と較べてみるまでもなく、次々と襲ってくる危難を巧みに切り抜けていく彼女の知恵と力と勇気が並々ではないのは、誰の目にも明らかである。千尋はやはり普通の少女を装った選ばれしヒロインなのだ。

自分の「名前」を守り抜くことが主題となっているこの映画の主人公の名前が、「千尋」と名付けられていることも非常に示唆的である。「尋」とは古代中国で八尺、日本では六尺（約１．８m）の長さをあらわす単位で、「千尋」がどれ位の長さに及ぶかは想像しがたいほどだ。よく形容される「千尋の谷」はしたがって、非常に高くて深い谷のことであり、しかも「尋」が尋ねる、問うという意味をも備えていることを考えると、「千尋」という名を持つ少女がその千尋（せんじん）の広さを舞台に、どのような八面六臂の活躍をしいられることになるか、想像するまでもない。

もちろん、千尋を小さなスーパースターとして描いたのは、単なる「冒険ファンタジー」であったからではない。子供は皆スーパースターとしての力を無限に秘めているという、宮崎監督の子供観からやってくるのは間違いない。『キネマ旬報』（０１年８月下旬号）のインタビューの中で、宮崎監督はたとえば、不思議の世界で両親が無人の中華料理店にある食い物を食べた結果、豚にされてしまうのに、千尋だけは絶対食べなかったことについて、こう語っている。

「これはヤバイって思う力を、皆子供は持っていると思いますよ。確かに大人が取り囲んでいろいろと言うことで、すっかり感覚が大人になってしまった子供もいます。それは非常に残念なことだけど。僕はそういう能力もそうですし、不思議の世界で千尋がちゃんとやっていける力。そういうものを彼女たちは、皆持っていると思う。僕は〝自分の力を信じなさい〟と説教をするつもりもない。ただ言えるのは〝大丈夫。あなた達はやっていける〟ということぐらい。でも僕は言葉だけで言っているんではなくて、本当にそう思っている。だから最後に千尋が両親の豚かどうかを、理由もなしにパッと見抜く。それは説得力があると思うんです。豚の顔にほくろがあるとかないとか、そういう現実的なことではないと思うんですよ」

ここでいわれていることは、二つである。一つは、《これはヤバイって思う力を、皆子供は持っている》ということ、もう一つは、その力を子供が発揮できないのは、《大

人が取り囲んでいろいろと言うことで、すっかり感覚が大人になってしま》うからだということ。そこから、大人の役割は子供を大人の感覚に慣らして子供の能力を押し潰すことではなく、子供の持っている不思議な力が十分に発揮できるように、《〝大丈夫。あなた達はやっていける〟》と励まし、見守っていくことではないか、という彼の考えが導きだされてくる。この彼の考えには、アニメの制作過程での実体験が大きく横たわっていることが、次のインタビューからもわかる。

「ジブリの新人達を見ていても、千尋のような適応力は皆持っているんです。〝上手くやったね〟と言ってやると、にっこり笑って３日間ぐらいは元気を出す。最近の子は鬱になったりすることが多くて、そういう意味では僕らよりも脆弱ですけれども。その適応力は変わりがないんです。そして労働には達成感というのがあって、それが人を支えていることは間違いない。（…）働くことによって、周りとの繋がりや、自己の価値観が持てる。だから他人の飯を食うことは意味のあることだと思うんですよ。ここでの千尋には釜爺や先輩のリンが世話を焼いてくれるんですが、彼らも相手に見どころがなかったら世話を焼くのは止めるでしょうね。千尋はそこで、いくつものテストを通っている。だから最後の方で銭婆が、それをくぐり抜けてきた子だから親切にするんです。」

適応力を身につけている子供たちは、その適応力を発揮できる環境でさまざまな多くのことを学び、周りとの繋がりを持ちながら、自己の価値観を育て、自分の気づかない能力をどんどん引き出して、いくつもの難関を切り抜けていくということである。宮崎監督からすれば、そのような力は本来子供なら誰でも持っているもので、選ばれた特定の子供だけが持つ超能力でもなんでもないということだろう。超能力というなら、どの子供も目の前に押し迫ってくる危機をくぐり抜ける力を発揮したときこそ、超能力なのだと考えている節が彼にはみられる。映画の中の千尋はしたがって、《いくつものテストを通ってい》くようになっている。そこで千尋（子供）はたくましく成長していくという神話が評価として語られることになる。

この成長神話に関して、先のインタビューで宮崎監督は次のように釘を刺している。最初の場面で千尋が暗いトンネルを抜けて不思議の世界に辿り着く時、お母さんの腕を必死に掴み、またトンネルを抜けて現実世界へ戻ってくるラストの場面でも、千尋は同じようにお母さんの腕を必死に掴んでいることに触れて、「受け取り方は観る人の自由ですが、あそこはまったく同じ画を使っているんです。お父さんの後ろ姿も最初と最後は同じ画ですよ。僕は千尋がトンネルに入ったときと出たときの違いというのは、成長というよりも持っていた力が出てきただけだと思うんです。成長神話というのがあって、成長を描くと良いということがありますね。でも僕は、自分で６０歳になって成長したかと言われても、それは場慣れしただけでね。到底賢くなったとは思えない。だから成長を描こうとは言いたくないんです」

最初と最後に同じ画を持ってくることによって、トンネルに入る前の千尋と出てきた千尋とが全く同じであることが強調されている。確かに映画を見ていても、あっけなく思われるほど、トンネルを抜けて現実世界へ戻ってきた千尋は不思議の世界で縦横無尽

に活躍していた千尋ではなく、トンネルに入る前のやせっぽちでふてくされた女の子そのままであった。お父さんもお母さんも豚の姿に変えられていたことや、彼女がトンネルの中で出会ってきた美少年のハクも釜爺もカオナシも、神々も妖怪も魔女も、そして多くの冒険も、すべてが千尋の夢の中の人物や出来事であるかのように、彼女の記憶に残っていないのが感じられる。だから、一見成長神話に似て、それとは無縁なところで１０歳の女の子の楽しく、はらはらさせられる活劇が描写されていることがわかる。

それでも千尋のスーパーヒーローぶりが予定調和的に展開され、収められていくことに、等身大の子供の有するリアリティーを欠いた物足りなさを感じることも確かである。彼女のドジぶりもけっして致命的な失策につながるどころか、逆に窮地を脱する機転や有効打に変わってしまうという、スピード感あふれる映像の流れの中で、千尋自身も我々観客も立ち止まることなく調子よいテンポに運ばれていってしまう。つまり、トンネルの世界の中での千尋の《成長というよりも持っていた力が出てきただけ》と宮崎監督がいうとき、力が出てくるそのあまりものストレートなありかた、ためらいのなさに、千尋が１０歳の女の子としてよりも、サイボーグのようなリズムを感じてしまう。だから次のようなコラム（『毎日新聞』０１・９・２３）が、疑問を呈することになるのも避けがたい。

《宮崎駿さんのアニメ映画「千と千尋の神隠し」を見終わった後、妙に不可解な印象が残りました。物語にいくつも疑問がわき、それが解消されないまま、映画館を出ることになったのです。

『小説トリッパー』秋季号（朝日新聞社・８５７円）で、東浩紀さんの連載評論「誤状況論」の７回目を読み、わだかまりが解けていきました。東さんは主人公の千尋が人生の選択にあたって悩んでいないのではないか、と指摘しています。

映画は、千尋という少女が異界に迷い込み、そこで奮闘し、再び、日常に戻ってくるまでを描いています。その過程で、彼女は次から次に外側から指示を受け、一つ一つステップアップするように、歩んでいきます。進路は自明のものとしてあるようで、そこに内面の葛藤はどれだけ描写されているでしょうか？。

東さんは「ロールプレイングゲームのように自分の役割を果たしてさえいれば人生は何とかなるのだ、というのがこの映画の主題」とつづります。そして、この作品の人気を、現実社会もそのようになっているからではないか、というのです。　（重）》

多くの賛辞ばかりが寄せられているなかでのこのような批判が、貴重なものであることはいうまでもない。ここでの指摘を取捨選択しながらみていくことにする。まず東浩紀の（この文章の中での）《主人公の千尋が人生の選択にあたって悩んでいないのではないか》という指摘は、映画が成長神話ではなく、子供たちの持つ潜在能力の高さに焦点を当てていることを考えると、映画の意図とが明らかに食い違っている。したがって、ロールプレイングゲームのような人生という指摘も当然違ってくる。にもかかわらず、これらの指摘や疑問を無下（むげ）にするわけにもいかない気がする。批判は映画にではなく、宮崎監督の千尋を描く子供観に突き刺さるのが感じられるからだ。つまり、向日性のよ

うな監督の子供観に異を唱えたくなってくるのである。千尋はやはり大人に受け入れられる〝良い子〟なのではないか。

宮崎監督は先のインタビューの冒頭で、１０歳の女の子のｲﾒｰｼﾞについて語っている。《彼女たちはお父さんとお母さんは、大事にしなきゃいけないと思っている。そこはまだ律儀なんです。同時に自分の中で何かが生まれていて、ただ思春期の時ほどまだ爆発していない。小さな時から持っている資質を引きずりながら、とても健やかな部分と不安な部分を持った存在。そんな風に僕は感じました。まあ、おじさんとしては彼女達に、〝僕は味方です〟と言うことしかできないんですけどね》

子供たちの「健やかな部分」よりも、「不安な部分」ばかりが拡大されて引きずりだされてくるようなこの時代の中で、「おじさん」としてはあまりにもみえなくなって隠れている「健やかな部分」に光を当てて描きたかった、といっているのではないか。１０歳の頃になると、誰もが見も知らない不安なトンネルの世界をくぐり抜けていくことになるが、心配しなくていいよ、強く生き抜く力は誰も持っているんだからね、という子供たちに対する応援歌のような、祈りのようなものを奏でたかったのではないだろうか。このようにみると、千尋は等身大の女の子を描こうとしたものであるよりも、普通の子供たちが奥深く秘めている潜在能力が引き出されてくる形象として描出されていることに気づく。千尋のような女の子はこの現実のどこにも存在しないけれども、どの女の子の中にも呼吸しているということなのだ。

もちろん、宮崎監督の祈りはファンタジーである。トンネルのような暗い映画館の中ではその祈りは伝わったかのように思えて、映画館を一歩出た現実の中では、トンネルをくぐり抜けてきた千尋がそれまでの不可思議な出来事を一切忘れ去っていたように、観客の女の子たちも千尋の冒険をすっかり忘れ去っているかもしれない。宮崎監督がそれでいいのだ、楽しんでもらえたらいいのだ、と思っている筈はないだろう。しかし、確実に忘れ去られていく。映画とはそんなものだからではない。千尋の描き方に１０歳の女の子の切り傷が刻まれていないからだ。監督はその切り傷を今度も避けたのである。現実を生きている女の子たちの切り傷をみればみるほど、そんな思いが強く働いたのかもしれない。切り傷なんぞわざわざ描かなくたっていいじゃないか。多くの観客もまた、わざわざ映画館にまで足を運んで現実の切り傷など生々しいものは観たくなかった。強く生き抜く子供ほど、それも大人に刃向かってくるようにはみえなければみえないほど、心地よいものはなかった。安心してみていられるのである。冒険、結構なことじゃないか。ちゃんと切り抜けてくるのだから。かくして宮崎作品は新しく上映されればされるほど、ファンを増やしていくのである。だが、それは一面であることも事実である。宮崎作品の本当の魅力は彼が描写する主人公よりも、主人公を取り巻く細部の描写に行き渡っていると思われる。監督が細部の描写に躍動感を与えながら、彼自身子供のように息を弾ませている鼓動が画像から飛びだしてくることが、かけがえのない魅力にちがいない。

２００１年１１月２６日記